

「笹川杯全国大学日本知識大会 2019」

感想文

目次

《 団体賞・特等賞 》

電子科技大学 日本語学科 大学院二年生	高潤	2
電子科技大学 日本語学科 四年生	江愷悌	3
電子科技大学 日本語学科 四年生	袁芸寧	4

《 団体賞・一等賞 》

南京工業大学 日本語学部 四年生	吳洲	5
南京工業大学 日本語学部 四年生	徐雪佳	6
南京工業大学 日本語学部 四年生	楊笑	9

《 団体賞・二等賞 》

上海外国語大学 日本語学科 大学院一年生	林睿	11
上海外国語大学 日本語学科 四年生	徐堯	12
上海外国語大学 日本語学科 三年生	陳芝宇	13
南京大学 日本語学科 四年生	王爍	14
南京大学 日本語学科 大学院一年生	姜塵緣	15
天津外国語大学 日本語学科 三年生	楊煜暉	16

《 個人賞・一等賞 》

広東外語外貿大学 日本語科大学院二年生	唐勁	17
南京大学 日本語学科 四年生	方思穎	18

《 個人賞・二等賞 》

聊城大学 日本語学科 三年生	王瀟慶	19
----------------	-----------	----

《 個人賞・三等賞 》

内蒙古大学 日本語学科 四年生	宋鈺	21
南京信息工程大学 通訳、日本語翻訳専攻 大学院二年生	張慶芳	22

《 個人戦成績優秀者 》

上海師範大学 日本語学科 四年生	辜傲然	23
------------------	-----------	----

《 特等賞 》

電子科技大学 日本語学科 大学院二年生

高潤

私と日本の出会いは今まで六年前のことだった。六年前、私がフランス語科の学生だった。当時、私はフランス語の勉強がどうしてもうまくいかないから、日本語科に転入した。今から見れば、絶体絶命の窮地に落ちた私にとって、日本語が暗闇を照らす一筋の光のように私の人生を導いて、私の前に日本という新たな扉を開いた。その時から、私がこの六年間に、色々な日本の言語、文化、歴史などの内容と接触して、一生懸命に学んだ。日本に関する知識が増えるにつれて、日本が知らないうちに私の懐かしい友人になった。

しかし、懐かしい友人といっても、私が時々見慣れない感じがある。具体的に言えば、この懐かしい友人がまるで複数の人格を持つようだ。私が見分けられない人格もよく出てくる。そして、私が見慣れた部分にしても、ある特定の条件によって、特定の場所に存在する想像の具現かもしれない。この角度から見れば、私にとって、日本が見なれたようで見慣れない国である。その理由として、私が日本への理解はまだ不足、あるいは、まだ初めての階段に止まったと思う。とにかく、私がずっとこの懐かしい友達との相談を回避していた。

それにしても、やっぱり、私がそのままこの遺憾を抱いて卒業したくない。私が日本という友達と相談したい！このクイズ大会それが日本という友達を了解する絶好のチャンスだと思うから、私が勇気を出して、クイズ大会に参加した。クイズ大会の問題範囲が非常に広い。前に言ったように私は最初あまり自信がなかった。しかし、クイズ大会の要求に沿って、もう一度改めて日本に関する知識を勉強すると、以前のバラバラな知識が繋がるようになった。準備する時、頭の中に線のようなものが現れた。その線が古い日本から出発して、現代日本を通行して、未来の日本へ続いて、私の知っているあらゆる分野と細かいことを関連した。そして、私の目の前の霧が段々消えて、日本に関する複数の面影が一つになって、日本という国のイメージが明晰になる。それによって、私がやっとこの懐かしい友達と一対一で相談した！成績とは関係ない。目標を遂げた今の私はとても幸せだ。

ありがとう、笹川杯！

江愷悌

笹川杯日本知識クイズ大会に参加して、美しい金陵で仲間たちと技を磨き合い、前途を考えることができたことは、とても幸運だと思います。そして自分たちのチームが並みいる強豪から最後に大賞を勝ち取ることができ、非常に喜んでいきます。

今回の並々ならぬ戦果は実力と好運がそろってこそです。準備段階では学部の先生方のさまざまな教え、大会本番では先輩の熟練した余裕と冷静沈着な同期に恵まれましたが、いずれも不可欠だったと思います。さまざまな要素が合わさって、電子科技大学日本語学科が「遠征」で最高の結果を得られたのです。

国内の日本語関連トップクラス大会である笹川杯では、主催者の心がこもった配慮も参加選手の積極的な活躍も、ひしひしと感じました。自分の知識の面や経験の不足も切実に感じたので、今後の学習生活の中でさらに鍛え磨かなければと思っています。

我が校は理工を重視した専門設計なので、外国語を学習しようという雰囲気はあまりありません。そうした中で、相応の専門の実力を発揮できる大会はとりわけ重要に映ります。笹川杯の各大会は、日本語に関心を持つ学生が交流し自身の実力を確かめる格好の場を提供してくれています。

相対的に閉じた教育環境の中で、横方向の比較と刺激が不足すると、井の中の蛙になる、自分の進む方向を見失うといったことが起きやすくなります。上には上があると意識するとともに、勉強した知識と技能を実際に運用することは、学科の価値を深め自己の能力を肯定する効果を持ちます。出身や背景を完全に無視して、似通った学習の過程と未来の抱負を持つ同い年の人や経験者に多く触れることは、とても有益だと思います。

ほかにも笹川杯で伝わってきたものはたくさんあります。その理由を突き詰めると、大会は具象化した形式で、大会を通して現れてくる、中日間の相互理解を促進し、未永い友情を望む熱い気持ちと、その大きな理想を実現するために実践を続ける努力、どちらも輝いているからです。そのため、事実に基づいて真実を求め、客観的な態度を持った知日派になって、日本のありのままの姿をもっと多くの人に紹介することは、外国語人材の道義上断れない責任です。

最後に改めて優秀なチームメイトと勤勉な指導教官に感謝し、中日双方の情義に篤い人々の力強い援助に感謝します。今度の訪日学習では、大会上で大いに才能を発揮していたみんなへの理解を深め、この「敵を友とする」体験が全く新しい発見と忘れ難い経験になることを望んでいます。共に改めて日本を認識しましょう。

袁芸寧

先生から笹川杯日本知識クイズ大会に参加すると知らせを受けたとき、私はまだ千葉大学に留学中でした。当時の自分にとって、知識レベルでも心理レベルでも満足な準備はできていませんでした。

帰国後、鳴り物入りで大会資料を復習する先輩と同期を見て、やっと「間もなく競技が始まる」と実感したのです。それから狂ったように問題集を当たり、少しずつ日本の地理、文化、歴史を詰め込み、最近の具体的なニュースを注視するようになりました。

チームの三人と引率の先生が南京に着いて、南京大学で他の参加選手と遭遇したとき、えもいわれぬ緊張感に包まれました。みんな準備を済ませて、自信満々で、分を鍛えるため、大学ために榮譽を求めに来ているのです。引率の譚先生も私達の内心の不安と怯えに気づいているようでした。先生は何も言わず宿泊先で豪華なランチをご馳走してくれた後、さらりと「みんな自分にプレッシャーをかけすぎないように。リラックスしてこの大会は体験だと捉えること。鍛錬になればいいので」と言葉をかけてくれました。先生の理解と励ましで、少しは緊張がほぐれた気がします。

前日に教室で早押しボタンのテクニックを練習しており、さらに先輩が力を発揮してくれたので、翌日の団体戦初戦の早押しクイズでは、水を得た魚のように十数問連続で回答し、首尾良くグループ首位に立てました。そのときの司会者の言葉が今でも印象に残っています。

「電子科技大学の皆さんは強引に早押しクイズを必須問題に変えてしまいました。」

団体戦の決勝に進めるという知らせを受けただけで、興奮が止まらなくなりました。最後に特等賞を得られたことは、完全に私達の予想外でした。決勝当日は三人で合理的に役割を分担しました。先輩は歴史の知識のストックが多いので回答担当。もちろん予想外の問題にぶつかったときや時事問題のときは皆で知恵と力を出し合う必要があります。私達は早押しボタンを担当し、機会があれば容赦なく押すことに。最後に勝利の鍵となったのもやはり早押しクイズでした。連続で回答権を獲得して何問か正解すると、我がチームの得点が場内最高点を逆転しました。

司会者が特等賞は電子科技大学と発表したときは、感動して飛び跳ねそうでした。舞台袖の先生が喜び安心している笑顔を見て、これまでの努力は何も無駄にならなかったと感じました。

この大会で得られたものは多く、教科書以外のものをたくさん会得できました。まず、短期間で大量に詰め込んでも一定の効果はあるかもしれませんが、最終的に助けとなっ

たのは日常的な振り返りと蓄積だったこと。次に、合理的に役割を分担することが団体戦では特に重要だということ。個々人の注意力は限られているので、チーム内での働きを最大化することがチームの成功する鍵なのです。

そして、心を合わせて協力してくれたチームメイトに、支え励ましてくれた引率の先生に、準備や世話をしてくれた南京大学の先生方とボランティアの皆さんに、日本に游学する貴重な機会を気前よく賛助してくれた日本の皆さんに改めて感謝したいと思います。笹川杯日本知識クイズ大会がますます発展し、日本文化に興味を持つ学生をより多く励ましてくれますように。

《 団体賞・一等賞 》

南京工業大学 日本語学部 四年生
吳洲

令和元年、11月17日。曇った秋の日。南京大学で開かれた笹川杯日本知識クイズ大会に参加し、「団体戦一等賞」という良い成績を得ることができました。これは先生方の日頃の一心の指導、そしてチームメイトと自分のふだんの興味、長い蓄積、努力とは切り離せません。

今回の知識クイズ大会には100以上の大学から総勢400人以上が参加しました。会場の装飾がとても合理的で、深く印象に残っています。まず初めは筆記試験で、可もなく不可もない出来でしたが、準備してきたテーマについてはよくできました。予選に進むと吉林大学、東北師範大学といった優秀な大学の学生が相手で、思わず「自分たちは大丈夫かな？」と疑ってしまいましたが、先生のお話で負担感をぬぐえ、勉強より貴重なお話だったと言えるでしょう。「他の名門校の学生もただの学生、君たちが劣っているとは限らないから、思い切って行ってみなさい。」最も深い恐れは自分の奥底から来る、自分たちで限界を決めるな、全力でかからないと、と思いました。

団体戦の予選では、出題範囲にざっと目を通してみるとかなり広いようでした。日本の政治、経済、歴史、地理、文学どれもあります。しかし最も多かったのはやはり日本史です。判断問題では、出題の角度が意地悪く難しかったせいか、あまりよくできませんでし

た。しかし前段階の点数にしっかり食い下がってさえおけば、まだ早押しクイズにチャンスがあります。早押しクイズについてはチームメイトに感謝しています。彼女たちは本当に優秀すぎて、ピンチでも混乱せず、異変に遭っても驚かず、才気にあふれ、この上ない文才でした。大方針が正しく小戦略が完璧だったので、わずかなリードで予選グループのトップになりました。決勝進出できるかは神のみぞ知る、人事は尽くしていました。

少し後になって成績が発表され、我がチームは予選6位で決勝進出できました。しかし私はまだ喜びを抑え込んでいました。まだまだ戦いは終わっておらず、決勝に進出したからには優勝を争うのです。なので直前にまた資料を復習し、テーマも見直しました。

11月17日、決勝の日。先に始まった個人戦で大会は最初の盛り上がりを見せました。間もなく始まる団体戦決勝も歴史的なものになる運命だと予告されているようでした。決勝が始まり、初めはうまく行かないで苦境に追い込まれましたが、私達は落胆しませんでした。チームメイトとお互いに励ましあって、「落ち着いて」「慌てないで」「たいした問題じゃないよ」といった声が耳元に響き渡っていました。最終的に窮地から反攻して残り2ラウンドで3位まで逆転し、もしまだ終わっていなかったら本当に優勝するチャンスもあったかもしれません。「団体戦一等賞」という良い成績を得られたのはとても光栄で、とても感謝しています。「3人が協力して努力した結果」と言えるものです。「幅広い知識」、「機敏な反応」、「現場での機転」、そして「少しの果敢さと剛毅さ」。

友情が一番、成績は二番、私にとってとても重要な収穫は、多くの道を共にする友達と知り合えたこと、そして自分を支えてくれる人がどれほど多いか分かったことです。一瞬で全身に暖かいものが湧きました。今回、私達が得られた荣誉と感動は、陰で黙々と支えてくれた人たちと分かち合わなければと思います。皆さんの存在があつてこそ、私達はこうして確固不動として3位になれたのです。最後に、笹川杯日本知識クイズ大会がますます発展し、中日の友好がとこしえに続くことを心からお祈りします。

南京工業大学 日本語学部 四年生

徐雪佳

今はだいたい午前1時、大学院入試を控えベッドに転がってタブレットでこの文を書いています。大会はもう一昨日のことですが、団体一等賞を得られた喜びは1日、2日どころでなく続くと思います。

大会参加の歩み全体を振り返り、参加申し込みから書くと、この大会に参加するのは1年生の頃から希望していました。当時は丁先生が私達の専門科目を担当していて、先

輩が一等賞に輝いた話はよく聞いていました。まだ日本語専攻では初心者だったので驚嘆するばかりでしたが、先輩たちができたなら1~2年後に自分もとは思っていました。そして2年生になり、果たして笹川杯の開催通知が来たので思いきって先生に申し込みましたが、申し込んだ学生のうち2年生では経験が浅いとのことので、参加者枠に入れませんでした。3年目は日本の三重大学へ交流学習に行ったので笹川杯はまたしても say goodbye。学部にいる間は縁がないのかとすでに考え始めていました。ついに4年生になった今年、開催通知は期限どおり来ましたが、申し込もうか今回は迷いました。すでに大学院を受験すると決めており、受験勉強の中で自分に足りないものが想像していたより多いことに気づいていたからです。もし参加したら勉強時間が少なからず取られ、入試に影響するだろうと思いました。そう考えながらも、この手はやはり学内選抜の連絡先グループをタップしていました。心に小鬼が2匹いて、片や入試に集中するように勧め、片や過去問を見てからでもいいや行け行けと煽ってくるかのようでした。果たして過去問を見ると心に疑問が浮かび上がりました。これが問題なものか、3年も日本語を学んだのはむだだったのかと。しかし改めて考えると、こんなものさえマスターせずに目標の院に受かる訳がないのです。なので学内選抜の数日前によく問題を考え、順調にレギュラー選手にもなれました。

大会への準備が始まった9月中旬から、まだ入試対策を重視していたうえにリーダーにもなり、一部の学生の作業はどうしても不意打ちになるので、大会への準備にかまっていられないときもありました。しかも当初の戦略は自分が専攻していた文学関係で、まさに好みでした。文学は大学院入試にも不可欠なパートなので、大部分の時間を自分の復習計画どおりに進め、ついでに大会のスコアもカバーできようと考えていました。しかしその後で、過去問をたくさん解き毎週集中練習するようになると、盲点が多すぎることは前から感じていましたが、自分の準備方法がいよいよ疑わしくなってきました。そもそも大学院を受験するのかまで疑問になってしまったのです。またその間は文学以外の地理、歴史、政治、文化といった分野については体系的な知識がなく、みんな断片だったので、出題がとても無鉄砲でした。一つの方向にばかり集中してはいけな、笹川杯の問題は幅広く細かいのだと考え始めました。自分が文学だけを担当して他の分野をチームメイトに投げるのは本当に行き過ぎですし、普段は文学以外の分野にも興味はあったので、毎日の勉強が終わってから、寝る前の1時間に日本の社会、歴史などの資料を見ました。一通り見ても覚えられるかは分からず、大学院に受かるかも分からなかったのですが、プレッシャーにはなりません。知りたいこと学びたいことがどんどん増え、1日が48時間あればいいのにと毎日願っていました。後輩が言うように、スポンジに化けたかのように日本に関することはすぐ吸収して身体化してい

きました。また単純に大会でランク入りしたいと考えるのではなく、本当にゆっくりとこうした学習の状態を好むようになっていました。

予選の日の朝、まずは筆記試験に臨み、終わってからいまいちだと感じました。筆記試験の成績が午後の正式予選の基礎点になるので、チームメイトの足を引っ張っていないかと心配でしたが、幸いまずまずの成績でした。午後の予選は出番が後のほうだったので、少し弱点を見つめる時間があるかと思っていましたが、各チームの競争があまりに激しく、しかも早押しで得点の追いつ追われつを見ていて血が沸き上がってしまいました。実力ある選手がこれほどたくさんいるのを目にすると、決勝に進もうという強い期待はなく、ここに参加できるだけで満足だと思いました。そしてとうとう出番です。筆記試験の成績はそれほどでもなかったのですが、必須問題の後から他チームとの距離が次第に縮まり、最も緊張する早押しクイズではボタンを押す担当になったのもものすごく緊張しました。押そうかな、押して答えられなかったら減点は？早く押しすぎたら減点は？押せなかったらどうしよう？もろもろ不確かなとき、ステージ近くの席にいる丁先生をちょっと見上げると、先生が何度繰り返したか分からない言葉「早押しは絶対に守りに入らないこと。押してこそチャンスがある、押さなければどんなチャンスもない」を思い出しました。そしてチームメイトの励ましもあり、連続して何問も回答権を獲得して正解することができ、グループ内の東北師範大学と追いつ追われつで、勝敗を分けにくかったのですが、ちょっとの差でグループ1位になれました。ステージを降りてから先生に「決勝に進めなかったとしても、この体験は十分以上に痛快で有意義でしたよ」と話しました。

その日の夜、決勝戦の名簿が出されたとき、私は知り合ったばかりの友達と歩き回っていましたが、我がチームが決勝に進めたと知って、みんなと翌日の戦略を相談し、心を整えました。決勝に進めたからには悔いはない一番の結果なので、ランク入りできなくても神レベルと戦うチャンスを逃さないようにしないと！

決勝での指定問題と必須問題はやや劣勢で、チームメイトも緊張していましたが、いずれにせよ早押し問題は思い切っにかかることになりました。私はまたボタンを押す担当で、決勝は予選と違い相手チームの反応がすばやいだけでなく正解率も高く、開始直後はどうがんばっても間に合いませんでした。後で主催者から出された写真を見たら、その時の私はひどい顔でした（顔を覆う）。幸いなことに後半でやっとタイミングをつかめるようになり、回答権を取れました。みんなが力をくれたおかげです。一等賞がもらえるとチームメイトに聞いたとき、感動して後輩に抱きついてしまいました。その後で先生にも。

この大会が終わったらすぐ入試対策にもどらなければならないのですが、この経験は

間違いなく大きな励みになりました。どのような決定をしたとしても、選んだからにはそこに向かって行こう、簡単に成功する確率はあまりに小さいのだと思います。自分のこれまで経験してこなかった難題に直面したら、表面にとどまるだけではいられず、対処しなければ。真面目に続けていけば、かなりの高みに立っていることに気づけるかもしれません。最後に、付き添ってくださった先生と協力してくれたチームメイトに感謝したいと思います。本当によくやったよね。またチャンスを提供してくれた主催者や、出会えた志を同じくする仲間たちにも。この大会は華麗にカーテンコールを迎えましたが、再会の時はまたあります。

南京工業大学 日本語学部 四年生

楊笑

3年生で唯一、南工代表チームに入れて本当に幸運でした。先生に選んでいただいたとき、必ず努力して先生の期待に応えようと密かに決意しました。2か月かけての用意が、2日間ではっきりします。我がチームは参加した114チームの中を次々と勝ち抜き、決勝戦に突入して、団体一等賞という良い成績を得ました。準備から参戦までやってきて、本当に感無量です。

振り返ってみると、収穫は本当に最後の結果だけではなく、準備の過程もその後の日本語学習に影響するため、私にとって貴重な財産です。もしこの過程をひと言で形容するなら、「識字率向上運動」を経験したようなものだと思います。昔から現代まで、歴史文化から政治経済まで、自然や地理から社会風俗まで、日本に対して全方位の理解ができました。実はそれまでそうしたことにとりたてて関心を持っていなかったの、知っていたことも上っ面の中の上っ面だけです。ですがこの長くも短くもない2か月の中で、スポンジしながら、およそ「日本」の2文字がついたものは何でも頭に吸収し、最後には確実に多くのことを記憶しました。他にうれしかったことは、すでに一通り歴史と文学史を学んだ状態で改めて文学の講義を受けたところ、先生の言うすべての点にすばやく反応でき、またひそかに補足もできたことです。秀才になったような感じがして実に爽快でした（得意顔）。

準備を始めたばかりのとき、まず一通り過去問を解いて、出題の傾向とタイプを大まかにつかみました。しかし過去問を通じて知ったことは多くがばらばら、断片的で、脳内でもぼんやりしており、記憶しても混乱してしまい、整った知識の体系を形成できませんでした。特に私は多くの分野でほとんど基礎がなく、その上ここ数年の考察がます

ます深くなっているため、明らかに過去問を見るだけでは不十分でした。そこで私は書物に転向しました。書物にはまとまった論理の体系がおのずとあることは知っていたからです。『日本の概況』は入門資料としてとても良い本でした。内容は手抜きなく周到で、また中国語版なので気軽に読めて、2~3日で見終わりました。読み終えて多少の基礎は出来た気がしたので、今度はジャンル別に読み始めました。まずは日本史に目を通し、中国語版と日本版を結び付けて読みました。古代史はとても混乱しました。天皇の名前があまりにも似ていて、皇室関係は大変でした。後の将軍家も皇室を見習っているのでしょうか。どうしてこれほどに似た名前ばかり付けるのでしょうか。何文字かが何度も何度も使われています。内心「にゃ?!」と思ってしまいました。人名で大混乱してしまい、一体どれが誰なのか確認するのに何度も戻り続けなければならなくなりました。この人は他に何をしたのかしら。誰とどういう関係なのかしら。そのため見るのがとても遅くなり、近代にはなかなか入れませんでした。文学史も同様に、前半は何度も見ましたが、後半はざっとしか見ていません。

また地理の知識も、1日から数日で一気に場所と輪郭と県庁所在地、河川や湖沼まで覚えるのは言うまでもなく難儀でした。地理は全局面を貫く存在なので、例えばある寺院、神社、事件を復習するときに地図上でその場所を調べて、ついでにその県の県名と県庁所在地が同じか、そこにどういった特産品があるかも調べました。そうしていくうち、地名を思い浮かべるたび背後に一連の物語が見えるようになり、どの地域も生き生きとしてきました。無理に覚える無味乾燥な感じではありません。しかし読み方というものも存外、最初に日本語での発音を覚えなければならなくて、口に出すたびに日本語で言うことを自分に強制する習慣を付けました。慣れてくると、どこかを思い出すたびにまず中国語ではなく日本語での発音が反応するようになりました。しかし今回大会では地理の問題が少なく、不満なあまり歴史に転じた先輩もいました(笑)。

本番での問題は全体的に例年より簡単で、ひねりのある問題がなく、基本的に歴史と文学、あとは社会の文化が主で、時事も多くはなく、とても恐れていた教養娯楽もそれほど出されませんでした。実のところ今回のテーマはかなり好みでした(微笑)。決勝の問題も難しくはなく、予選と違いませんでした。繰り返し考える知識はありましたが、早押しは手の早さと反応する能力でした。一万点をもぎ取った先輩に拍手です。予選から決勝まで、判断問題で後れを取っては早押しで逆転し、この「妙手」のおかげで「回復」できました(ぺこり)。しかし決勝では予選ほど早押しできず、やはり決勝進出チームはどこも早いのです。それまでごくシンプルに、判断問題は50%の確率、早押し問題は25%の確率で、判断問題はそれほど問題にならないと考えていました。結果は平手打ちを食らったように、判断問題で折れそうになりました。判断問題に落とし穴が多す

ぎて、違うと判定するには違う点を見つけ出す必要があります、合っていると判定するには全部が合っていると判断する必要があります。でも選択問題ならば重要なポイントさえ押さえておけば答えを選べます。ああ、痛い教訓だった～、終わってから気づいたのが惜しい～

ちょっとした笑い話ですが、回答席に立って参加していたとき、特に決勝で、回答権を得られない問題がたくさんあり、まだ十分に答えられていないと感じました（顔を覆う）。実は元々かなり緊張しやすいほうだったのですが、今回は団体戦だったので、一人で戦っているのではなく、2人も最高のチームメイトがそばにいと分かっていたので、回答席に立っても緊張はしませんでした。しかしそれから早押しクイズに入るとどんどん興奮し、早押しクイズの刺激で武者震いしてしまい、離席すると体から力が抜けたように感じました（気絶）。

全体的に、今回大会は結果も過程も思い残すことはありません。これまで万全な準備がなく、回答席に立つ瞬間まで資料を見続けることしかできませんでした。先生には本当に感謝しています。いろいろな資料をずっと整理してくださって、お忙しいところ時間を割いて毎週トレーニングしてくださって、大会期間にもものすごく周到に、事の大小に関わらず配慮してくださいました。もしその成果が十分に発揮できなかつたら先生に申し訳ないと思っていました。しかし一番の恩返しはできたと言えますし、自分たちの努力も実りました。とは言え日本語の初学者にとって知識クイズ大会はコースに立たせてくれるものに過ぎません。引き続きこの道を進み、さらに努力を重ねて、絶えず改善しようと思います。

《 団体賞・二等賞 》

上海外国語大学 日本語学科 大学院一年生

林睿

みなさん『東大生』、『Q様』というクイズ番組を知っていますか。2年前からこの二つの番組に出会い、そしてのめり込んでしまいました。非常にいい番組です。水上颯さん、伊澤さん、カズさんみなすごい人です。この番組を見て、毎回面白くて笑うばかりでなく、

漢字や日本の歴史や世界遺産について、いろいろな勉強になれます。そのおかげで、クイズに興味を持つようになりました。いつかチャンスがあったら、自分も早押しボタンを押したいと思っていました。ですから、非常に喜んでこのコンテストに参加させて、私の小さな夢を叶えさせていただきました。また、いい思い出にも残りました。

今回のコンテストについて、ひとこと言えば、激しい試合でした。予選では私たちのチームが余裕で、そして、誇らしいほど高い点数で通過しましたが、決戦では一刻も油断できず集中力を最大限にしなければなりませんでした。ほかのチームがみな強かったですから。特に早押し問題ではみな押しのチャンスを競って、ボタンをどんどん押しまくる状態でした。最後の問題は私たちのチームの早押しボタンが地に落ちたほど激しかったです。結局、十分の差で一等賞とすれ違ってしまいました。ちょっと残念な結果でしたが、忘れ難く、いい体験でした。

また、反省した部分もあります。今回の出題内容は日本の歴史と地理と文学について結構多く出されてきました。その中で自分の弱い部分がまだまだたくさんあることが今回のコンテストで知りました。今後はさらに勉強する必要があるとしみじみ感じられました。

最後、同じチームの仲間たち、協力をくださった指導先生、そして、いろいろサポートしてくれたスタッフさんたちと今回の訪日チャンスを提供してくださったスポンサーに心から感謝いたします。今後、また機会があれば、是非このコンテストに再びチャレンジしたいと思っています。

上海外国語大学 日本語学科 四年生

徐堯

笹川杯クイズ大会に参加することは2回目となっています。2017年上海交通大学で行われた笹川杯クイズ大会で予選敗退でした。来年卒業する見込みの私は、今年再び応募し、上海外国語大学を代表して、悔いのないように頑張りたいと思っていました。

前回より、今回はもっと自信があります。2018年秋から、留学をきっかけとして東京を中心とする日本各地を見学していたので、日本歴史、地理などに対する認識がより一層になりました。

2年前より、笹川杯クイズ大会が成長してきました。2年前と比べると、大会のルールがもっと整備され、予選突破できなかった選手たちももっと楽しめるようになったと思います。

また、南京大学の至れり尽くせりのおもてなしにもこの場を借りて再び感謝を申し上げます。ホテルの部屋が住みやすいし、食べ物もおいしかったです。会務をしていただいた皆様、お疲れさまでした。

最後に、笹川杯クイズ大会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

上海外国語大学 日本語学科 三年生

陳芝宇

優秀なチームメイトと共に大学を代表して2019年の笹川杯日本知識クイズ大会に参加できて嬉しく思っています。信頼し支持してくれた学院の上層部、先生方の温かい手助けに感謝しています。

三年前に日本語専攻に入ったばかりのときは、日本の成熟した文化産業で生み出された多種多様な製品—アニメ、漫画、バラエティ、ドラマに夢中な高校生で、この一衣帯水の隣国に対する認識は他人の二次創作から来ていました。

この言語を学び始めたそのときから、まるで鍵を与えられたように、認知の扉を開けるようになりました。

言語の学習は木を植えるようなもので、その成長は毎日の一心の水やりが頼りですが、時間の積み上げにも依存します。文化の学習は言語の学習と似ているので、単語のカードを収集するように種々の文化の知識を収集し始めました。

「笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会」は中日共催の大学生向け大会です。中国青年に日本への理解を深めさせ、日本語学習意欲を起し、両国の文化交流を促し、中日関係の未来を担える人材を育成することを目的としています。今回の参加経験で、外国語としての日本語が国内で発展している様子を知り、参加選手達と競う中でみんなの日本文化に対する情熱を感じました。日本語学習者達に、文字や語彙に含まれる歴史や文化、自然や地理が育んだ風土や人情、産業経済から社会の娯楽まで、漢字かな文字から日本文学まで、地理の風景から祝日の習わしまでを学んで理解するよう促すのはまさに強烈な知識欲。この大会は、知識を体系立てて記憶しただけでなく、日本文化をより全面的に深く認識する機会となりました。

一つしか知らない人は、どれ一つも知らない

総合大学で日本語を学ぶ私達は、単純な言語学習のレベルに止まらず、自分の専門を「日本学」だと理解すべきなのだと初めから気づかされます。言葉そのものよりも重要なのは、言葉を通じてその言葉を使っている民族や国の生い立ちと今を理解することです。今回の笹川杯日本知識クイズ大会は、まさに日本に対する体系的な認識を深める絶好の機会となりました。

日本語の言語と文学を専門にしてもう四年目ながら、日本語そのものも日本という国についても一知半解で、歴史のうち比較的肝心ないいくつかの断片をある程度知っているだけだったかもしれません。今回の大会のための準備は、本科の学習に対してきわめて必要な補充になったと言えます。笹川杯は数千年来の日本のイメージを描く助けになりました。系統立てて関係する本を読むことで、講義では整理しにくい脈絡や枝葉末節が次第にはつきりしてきます。

しかし、もっと重要なことは、それらの理解を通じて現実の中で何かを映しだせるようになることだと思います。歴史を読むことは同時に現実を理解することであり、過去とだけ通じるのではなく現実と対話しているのです。同様に、視線を今の日本で発生しているさまざまな変遷に焦点を合わせるときも、歴史の中に手がかりを探せます。かつて日本という土地の上で発生した史実と日本に今起きていることは、今まで記憶してはいても理解できない部分が多く孤立して存在していましたが、今回の笹川杯の中で一つひとつつながってきました。日本を知り、ひいては自身を振り返ることに間違いなく重要な意義のあることだと思います。

このように、ひとつの言語を学ぶことは会話、読み書き、訳ができるだけではなく、単一の文化の背景にいる私達が四方の束縛を脱して自分の小屋を出て行き、いっそう客観的に他者を評価すると同時に他者から自身を振り返る窓を開いて当然なのです。自己中心主義を抜け出し、文化の傲りを手放してこそ、日本が決して追随してばかりの模倣者ではなく、自文化の根底は守ることを基礎として他者の長所を広く吸収しているのだということに目覚め、よそと比べて自分たちに何があり何が足りないのかを本当の意味で反省できます。選択問題は永遠に固定的な解答を持っていて、歴史もすでに変えることはできません。私達にできることは、歴史を鏡として自分を省み人を観察することだけです。

宗教学者のミュラーに「一つしか知らない人は、どれ一つも知らない (He who knows one, knows none.)」という言葉がありますが、中国にとっては、日本こそが知らなければなら

ない「もう一つ」だと思えます。

南京大学 日本語学科 大学院一年生

姜塵縁

参加者として再び南京大学での笹川杯日本知識クイズ大会を見届けることができたことはたいへん幸運でした。今回の大会での収穫は大会そのものを遙かに超えており、大会で得られた経験も期待を遙かに上回るものでした。

まず、今回の準備の中で、繰り返し『詳説日本史概論』、『詳説日本文学史』、『日本史年表』を読んで暗唱することで、日本史に対していっそう全面的な、豊富な認識を得られたと思えます。特にチーム内での役割分担で自分が担当した江戸、明治、戦後の部分については、それぞれの歴史上の事件に対する理解と各事件の間のつながりを感じました。読書を通じて江戸、明治、戦後といった時期の日本の政治、社会、文化、経済の全貌を理解し、江戸から明治にかけての日本の巨大な変化を感じました。その中で、それまで知らなかった知識と、この二つの時代が日本に対して持つ意味についての新しい認識が得られました。最も興味を持った明治時代については、初め興味のなかった岩倉使節団、西南戦争などについて理解を進め、さらにそれらの背後でのつながり、例えば共通する時代背景と関係者の間のつながりに気づきました。戦後については、通史を読むことで、日本の戦後のいくつかの政策を江戸時代と結び付け、また新しい認識を獲得しました。今回大会での収穫は一番に、図書目録を読むことで豊富な歴史の知識を獲得できたことだと思えます。

そして、大会での経験は自分にとって格好のテストだったと言えます。緊迫した筆記試験、予選、決勝戦を通して、他大学から参加した選手の姿を目にし、自分の準備不足も感じました。クイズ大会とは言え、競技会なので、磨く必要があるのは知識だけでなく、進行テンポの把握、ルールについての認識と理解、そして臨機応変な能力も求められると思えます。中でも特に印象深いのは、個人戦でも団体戦でもめざましい成績を上げた他大学の選手がいたことです。また、今回大会ではテーマもハイライトだったと思えます。ルールで認められる最大限の範囲で、できる限り学生の歴史と文化の知識を試す出題は、大会を通して以前なら体系的に学べなかった知識をたくさん主体的に学べたと言えるもので、選手一人ひとりにとって大きな収穫になったと思えます。最後に、訪問する機会を下さった日本財団に心から感謝し、笹川杯日本知識クイズ大会のますますの発展をお祈りします。

楊焜暉

「笹川杯」全国大学生日本知識クイズ全国大会にまた参加できて嬉しく思っています。またと言うのは、2018年の舞台にも立ったからですが、今回の大会に参加したことに違う意味を持たせてくれています。2018年の北京行きの高速度鉄道では、好奇心が心を占めていました。全国大会にあこがれるばかりで、最も基本的な知識のストックをなおざりにしていました。結果、我がチームは初戦で落ち込み会場を後にしました。今年また参加できる機会を得られて、自分の不足を深く感じていたので、去年の倍の努力で準備した結果、団体戦で二等賞、個人戦でも二等賞という成績を獲得できました。

総じて言えば、知識クイズ大会の出問範囲は広いものの法則性が少しあります。たとえば今年の大会では歴史問題が重視され、多くの問題が出されました。また、きっと重点になると思っていた時事問題がいつまでも出されず、団体戦の最後数問でやっとおなじみのテキストが出てきたときは内心どうしようもなく感じ、がっかりして笑ってしまいました。たぶんこれも「笹川杯」全国日本語知識クイズ大会の魅力のありかなのでしょう。出題に法則性がありながら、それほど捕捉しやすくもないのです。自分では出題者に凶星をさしたと思っていると、往々にして自ら用意した穴の中に転げ落ちてしまいます。選手は毎年このように「痛い楽しい」のです。

我がチームは団体戦決勝で理想のレベルまで行けませんでした。おかげでチームワークの重要性を痛感しました。団体戦はまさしくその名の通り、チームが息を合わせ全力で勝負する戦いなのです。問題は早押しして回答しなければなりません。早押しの得意な人が回答も得意ではない場合、協力の重要性が現れます。回答権を獲得してからわずか3秒で答えを言うには、暗黙の了解がないと誰も答えない、押した人が誤答して正解の分かる人が口を開けないといった問題が起きます。知識の蓄積はもちろん重要ですが、チームメイト同士の信頼、暗黙の了解はもっと不可欠です。

最後に、二度の知識クイズ大会に選手として参加でき、感無量です。この二度の大会には感情のほとばしりも悔しさもありました。多くの日本語人材があこがれる学界の権威を目にすることができ、たくさんの尊敬できる仲間とも知り合えました。「笹川杯」全国日本語知識クイズ大会は中日の青年が友好的に交流する大舞台として、きっと魅力を放ちつづけ、輝きつづけるでしょう。

「笹川杯」全国日本語知識クイズ大会のますますの発展をお祈りします。

《 個人賞・一等賞 》

広東外語外貿大学 日本語科大学院二年生

唐 勁

まずは主催者の南京大学、協賛者の日本科学協会と日本財団、母校の広東外語外貿大学及び指導教官の趙曉靚先生、引率教官の程亮先生、そしていつも陰ながら支え続けてくれた妻に感謝の意を申し上げます。この一世一代の晴れ舞台に立つことは、非常に名誉なことです。よわい 35 の自分は、間違いなく歴代最年長の選手であろう。粒揃いの若手選手の中に優勝することは全くの予想外でした。

次に大学院入学までの経緯を振り返ります。若い頃大学受験に失敗し、良い大学に入れませんでした。冴えない学生時代があつという間に過ぎ去り、卒業間際からコツコツと念願の日本語を独学で猛勉強し、以後仕事しながら関連資格を次々と取りました。しかし、何もかも中途半端な自分は、就職も仕事もうまくいかず、三十路突入してから、「このままで一生終わりにたくない！人生を変えてみたい！」という強い信念のもとに、また日本の歴史文化への愛が高じて、大学院受験を決意しました。仕事でてらの受験勉強は辛かったが、その甲斐があつてトップの成績で入学試験に合格しました。

大学院で自分の専攻は思想文化です。かねてより日本の歴史が好きで、紙・電子を問わず、日本語の本を読み漁りましたが、司馬遼太郎の小説か一般向けの本がメインです。外国人が本格的に日本史を勉強したいなら、せめて日本の高校生と同レベルまで達する必要があると認識しています。そこで、入学前からしっかり基礎作りのために、高校生向けの日本史参考書を買って集めました。例えば石川晶康先生の『日本史 B 講義の実況中継』シリーズ、佐藤優氏監修の『いっきに学び直す日本史』などに大変お世話になりました。また、古文・漢文も入門書で一応最低限の知識を身に着けました。余談ですが、NHK の大河ドラマや『プラタモリ』のようなテレビ番組は良質なエンターテインメントとして非常に勉強になり、知的好奇心が満たされます。こうした地道な努力は結果に繋がると信じています。

さて、いよいよ本題の知識大会に入ります。最初に選手募集の話が出た時、公式サイト過去の問題を覗いてみたら、知らないことばかりで、「全国大会優勝なんて無理！」と思い込んで名乗り出ることはありませんでした。結局周りの推薦で、自分に白羽の矢が立ちました。チーム全員がダメ元で大会に臨み、打ち合わせも特訓も皆無でした。準備時間を割けない自分は直前に苦手な文学史を少しかじりました。大会当日、朝の 150 問の筆記試験は得意な歴史問題が多いので、手応え良く 1 時間弱で解き終わりました。

した。昼の結果発表では、自分は 2 位で個人予選に入り、幸先の良い好発進でした。午後の団体予選で

は、正誤問題に 8 割が正解で、早押し問題も全員冷静沈着に対応し、所属グループの中に一位となりました。試合後、他の学校の方々から温かい応援と祝福の言葉をいただきました。我がチームは最終的に団体予選で八位となり、決勝進出ならずですが、団体三等賞獲得で悔いのない健闘ぶりでした。夕方の個人予選になると、所属グループの中に強敵があり、早押し問題に何問も取られ、残念なごとに良い点数を取れず、辛うじて七位で決勝進出。翌朝の個人戦決勝、八人の選手が同じ土俵に上がります。自分は指定問題も正誤問題もミスが少なく、まずまずの序盤でした。肝心な早押し問題では、やはり同じ強敵の前に、遅れを取りました。元々勝敗に拘らない自分は、心を無にして、日本武術でいう「後の先」の要領で相手のミスが出るのを狙って、追加回答で着々と点数を稼ぎました。その結果、自分は二位となり個人一等賞決定です。試合後、多くの方々から声を掛けられ、善戦ぶりを称賛されました。

今回の大会出場・受賞はまさに自分の 14 年間の日本語歴の総決算であり、日本語学習者冥利に尽きる出来事でした。受賞はもちろん嬉しいですが、何より一番大事なのは、この檜舞台に立つことによって、全国から集まってきたたくさんの素晴らしい先生方と選手たちにめぐり逢い、激しい試合や何気ない雑談を通じて友情を結ぶことです。今後は初心を忘れずに、生涯学習に徹して日々精進して参ります。最後に今回の大会に得た教訓で締め括ります。

1. 継続は力なり。焼き付け刃の特訓よりも日頃の積み重ねの方が大事です。
2. 「およそ戦というものは、五分をもって上とし、七分を中とし、十分をもって下とす。五分は励みを生じ、七分は怠りが生じ、十分は驕りを生ず。」(by 武田信玄)

以上です。長文失礼致しました。

南京大学 日本語学科 四年生

方思穎

「笹川杯」大学生日本知識クイズ全国大会に参加して、日本の歴史文化に関する認識と理解を改めて整え、深め、広げることができました。

総合大学で外国語を学ぶ者として、言葉そのものだけを見てはならず、日本のさまざまな面、ひいてはもっと果てしなく広い東方全体に目を向けるべきだとは分かっています。しかし以前は、言葉や文化をそれぞれ小島に喩えると、個別に遊覧しがちでした。歴史の海に浮かぶ一見して無関係な島々は、実は深海で陸地と連なっているのに。そのため

過去の自分は歴史を学ぶとき目の前の手がかりばかりを追いがちで、その中身は検索して閲覧すれば自ずと浮かんでくると信じ込んでいました。しかしそうしていると、日本についての理解は粗いものになってしまいます。月日のたつうちに脳の中で記憶が秩序なく混乱し、じっくり見なおす足かせになってしまいました。

なので、「笹川杯」大学生日本知識クイズ全国大会はある意味、新しい学びの道をくれました。事実の理解に力を入れ、とことん溯って読んでいき整理する中で、長い日本の歴史の流れ全体から、多くの紆余曲折や悩み、困難が見えるのです。そして答えを発掘すると同時に、いくつかの歴史の観点に対する盲従も捨てます。また、それまでに読んだ歴史物語、文学作品が日に日に具体的で生き生きとしてきて、暗黙のうち当然だと思っていたことがらについても理解を深め改めて問い直すことができました。

それだけではありません。本番に弱い自分にとっては、決勝の舞台そのものが巨大な挑戦です。チームメイトと先生の支え、ストックした知識にある程度の自信がなかったら、きっと最後まで緊張を克服できなかつたはずです。

進学して今後も引き続き日本の文化や歴史を学ぶこと選んだ自分にとって、「笹川杯」は疑うまでもなく貴重な授業です。たとえ日本に存在するさまざまな神秘を知り抜くことが永遠にできないとしても、この学科の中で持続的に何度も理性の危機を経験し、何度も感性の美を理解していきます。

最後に、自分と同様にこの学科を愛する仲間と共に日本を訪問させてくれる日本科学協会と日本財団に感謝を申し上げます。2月の出会いを期待しています。

《 個人賞・二等賞 》

聊城大学 日本語学科 三年生

王瀟慶

2019年11月に参加選手になって以来、自分の身分、生活目標がみんなとは違うものになったと感じていました。選手になってからは、大学に対しても先生に対しても、あ

る程度の責任があるからです。特に自分が笹川杯全国日本語知識大会の聊城大学代表チームに選ばれたと知ったとき、責任が重大だと感じました。この過程全体で、一定の努力を払わなければならない、栄誉の獲得が目標なのです。大学と一心に指導してくれる先生方にお返しを。

毎日の暗唱、学習は確かに大変ですが、大会はもっと残酷です。大会はほんの数時間ですが、そう簡単にはいきません。長時間トレーニングした基礎の上で、学び、蓄積して一定のレベルまで修行し、十分に準備しないと参加できない大会です。自分が経験したトレーニング過程の苦しみは決して大学入試に劣らないと感じました。準備も酷暑を経て、トレーニングも徹夜になり、知らず知らずにほぼ全選手が「寝食を忘れる」境地に入っていました。自分が何かしようと決意したときや、何らかの目標のために繰り返し訓練するとき、状況がどれほど困難でも全身を遮る障害物にはならないのです。大会準備の過程がつらくてもチームの誰も投げ出さなかったことは誇りに思っています。

今回大会に参加する機会を下さった方々に感謝しています。この参加経験は人生に濃い記録を残しました。学べたことが本当に多く、競技の過程全体で、知識が向上しただけでなく、視野が絶えず広がり、自信も強まり、意思の堅さも鍛えられました。何より、注意深く落ち着いてことに当たる重要性が分かりました。大会では些細なミスでも苦しい準備の中で流した汗水が無駄になり、埋め合わせるチャンスのない無念さを残しかねないからです。おかげではっきりと、チャンスが来た時はしっかりとつかむべきだということが認識できました。

最後に自分の試合成績を知ったときは、心の中が激しく沸き立ち、自然と感謝の気持ちが湧いてきました。一心に育成してくださった先生にとっても感謝しています。ずっと準備に付き添って、いろいろ説明してくださいました。全方位の指導と支持のおかげで大会に専念でき、大学の指導部と先生方にも感謝しています。また、努力が受賞に結びつかなかったチームメイトには同情します。本当はみんなよくやったのに、運命の神がこちらを向いただけなのです。

《 個人賞・三等賞 》

内蒙古大学 日本語学科 四年生

宋鈺

ムダ知識はない

今日は12月6日、知識大会からもう三週間が過ぎました。決勝戦の時、選手の一人一人が目の前の問題に夢中になって、精一杯でボタンを押す姿が今も昨日のこのように思い出されます。

去年の大会は北京大学で行われました。そのころ、ちょうど北京大学に国内留学をしていたが、他の授業があるので試合を見に行くことができなかったのです。個人の特等賞を取った学生は同じ授業をしていた北京大の邱さんでした。先生もクラスの皆も邱さんの成功に大変喜んでいました。うちの大学も大会に出られるといいなあと思いつつ、6月に先生から「うちは今回の知識大会に参加できるよ」というメッセージが届いて、本当に嬉しい限りです。

8月から試合の準備を始めました。最初は幅広い問題に困っていたが、一本一本の問題を自分で調べ、答えを見出すことの達成感が自信と勇気を与えてくれました。そのように、準備が順調に進んでいました。しかし、たまには心の中に疑問が湧いてきます。2000問以上の問題を復習したが、本番の試合に役立つかどうか、初参加としてのうちの学校にはとても想像できない。自分がしていることは本当に有意義なことでしょうか。多くの知識を知れば知るほど、未知の世界の広さに恐れる、というような気がしました。

とうとう大会の日が来て、予選を無事に突破しました。胸躍りながら緊張を抱いて迎えた準決勝では、一番目の問題がとても印象深いでした。弥生時代の最大の二つの特徴は水田稲作と土器の使用、これは正しいでしょうか。最初は○と書いたが、一瞬違和感を感じて、文化史の授業で先生が強調したことを思い出しました。いや、土器ではなく金属器のはずだ、と最後に答えを×にチェンジし、点数を取りました。また、決勝戦も以前ほかのところで見たことのあるものが出てきて、梅棹忠夫という人の研究についての問題でした。

彼の著書が先生に推薦され、読んだことがあるのだが、細かいところをつい飛ばしてしまい、結局正解とすれ違いでした。

正直に、試合の準備のためではなかった知識がその場に出て、さすがに驚きました。心の中の疑問も共に解けました。無駄な知識はない、学んだ全てのことはいつかどこかで思いがけない形で役に立ち、自分の糧になるのです。今回の知識大会に参加できて本当に良かったと思います。これからも恐れずに勉強を続けて、様々な経験やミスを通して頑張っていきたいです。

南京信息工程大学 通訳、日本語翻訳専攻 大学院二年生

張慶芳

南京信息工程大学の選手で、張慶芳と申します。先月、南京大学で開催された笹川杯日本語クイズ大会に参加することができて、誠に光栄の至りです。今回の知識クイズ大会の参加者は114校から延べ400人余りの人数に達し、日本語勉強者のパーティーと言えます。

七月半ば、学校の代表に選ばれました。しかし、夏休みに会社で実習して、忙しくてたまりませんでした。そして、九月からチームの三人は其々自分の用事があるから、準備する時間はあまり足りません。それでも、夏先生は週に一回私達を集めて、勉強会を行いました。勉強会で私達は日本の文学、文化、政治、経済、地理、歴史、娯楽など、各方面について勉強しました。毎週の勉強会で新しい知識を覚えることができて楽しかったです。

大会は個人戦と団体戦に分けた。残念なことに、うちの学校は団体戦の初戦で敗北してしまいました。私は個人戦の初戦に入って、そして幸運で17日の決戦にも入りました。残念なのは、個人戦の決戦で10分負け、ベスト6に進出できませんでした。それでも、このクイズ大会に参加してよかったと思います。今度のクイズ大会は私にとって貴重な経験です。この大会を通じて、自分が勉強すべきものはまだまだいっぱいあるということが分かりました。

ここにて、どうしても感謝したい人がたくさんいます。まずは、親切に指導してくださって夏先生に感謝の意を表したいです。そして、共に戦って楽しい時間を過ごしたチームメートの二人に「ありがとう」と言いたいです。最後に、こんなすばらしい機会をいただいた日本科学協会、日本笹川財団、主催の南京大学及び協力していただいた皆様に感謝しております。今年の笹川杯に会いできてよかった！

◀ 個人戦成績優秀者 ▶

上海師範大学 日本語学科 四年生

辜傲然

このたび、上海師範大学を代表して、南京大学で開かれた笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会に参加し、幸運にも日本を訪問する資格を獲得できました。ここで自分の深い感銘に言及するならば、日程ごとの体験まで細分化すると、一瞬で消えてしまうような慌ただしさを感じました。知識に内面化できた収穫で言うと、完全に理解できたような不思議さを感じています。

元は日本語学科ではない史学部の学生でしたが、言語と歴史についての知識をもっとしっかり理解したいと強く望み、一年次に専攻を変えました。日本語学科で得られた知識は予想していたよりずっと濃密で重々しく、三年次の交換留学でいっそう具体的に日本の近代思想史に対する研究への興味が湧きました。帰国して代表に選ばれたとき、どうしてよいか分からず、時間のスパンが短い近代史の知識を除いて、日本の知識が想像していたよりずっと偏っていて浅かったので、短い時間ながら研究範囲以外の本を読み、列島の地図を登別から那覇までチェックし始めました。たとえ名高い女流文豪とは言えどうしても日常と合わない清少納言、紫式部も学びました。遠野にたたくみ見守る柳田先生について読み、奈良時代の北九州の防人歌について聴き、関が原古戦場の精鋭な騎兵を夢に見たりもしました。気づいて驚いたのは、知識は「一度限り」のものではないことで、研究分野と少しずつつなげると、日本の全体的な枠組みの認識が組み上がりました。今回の大会がなければ逃していたかもしれない、知識の不完全な部分を埋める貴重な機会です。

また、日本での進学を希望しているので、研究論文の数に圧倒されて実社会に触れずにいる自分が、この大会を契機に、夜の杜厦図書館で山月を眺め、明け方のキャンパスの裏山で生活を感じ、忙しい中で暇を見つけ療養する気持ちのほか、平凡さの中から得られる気づきさえ感じました。仙林で感じたのは原初の生理的欲求のような「自然回帰」願望で、それにより焦る心が慰められ、後の学習生活に専念できるようになりました。その旅のはかない神秘さ、ひっそりと静まり返った感じに、ほんの数週間で隔世の感がするほどでした。

この大会では何も欲を張っておらず、成果がいまいちではあったものの、さまざまな体験の収穫は、確実に深く心にとどめます。